

入江長八 の 作品が残る

重要文化財「松城家住宅」の 塗壁について

その4. 主屋2階窓廻り

早稲田大学理工学術院
嘱託研究員

齋藤金次郎

●はじめに

2階外壁についてはこれまで述べてきましたが、南と北面の窓に洋風意匠を強調する独特の漆喰額縁蛇腹と柱頭・柱脚に漆喰装飾を施した円柱が建てられ、西面には半円付き鎧戸窓さらに東面には杵を漆喰で塗った窓が設けられている。本号では窓廻りについて紹介したいと思います。

①西面半円付き鎧戸窓

西面には漆喰地に青色で彩色した半円形付きの鎧戸窓が3箇所設けられている（写真-1）。しかし、実際に開閉できる窓は南端の一箇所のみで、他の2箇所の鎧戸窓は擬窓となっていた。開閉できる鎧戸窓は木杵に砂漆喰を塗り、金鍔押さえ仕上げとしているが、他の2つの擬鎧戸窓は杵からガラリ部分を含む全てが砂漆喰で盛り上げた手の込んだ総金鍔押さえ仕上げとなっていた。更に現状では褪色して、仕上げ状態が明確に把握できなかったが、明治期の写真では鎧戸に着色がされていたことも明らかになった。調査でも写真-2のように窓杵やガラリの見込みに淡緑色と焦げ茶色の着色の痕跡が確認でき、上部半円形蛇腹部分は鎧戸と同様の砂漆喰で塗り、内側小壁は濃い青色漆喰で仕上げていた。恐らく、窓を表現しようとしたものと思われる。現状の青色は後補で当初の青色漆喰面に白漆喰を塗り重ねて塗装されていた。今回の修理工事では半円形の擬窓を取り外すことができたのでよく見ると、当初の塗工程は継ぎ合わせた板下地に鋸目を入れ、生漆喰を薄く塗った後に砂漆喰を8mm程度塗り重ね、その上に濃い青色漆喰を1mm位の厚さで塗っていた。蛍光X線分析の結果、当初の青色顔料は岩科学学校（明治13年）の「鶴の間」でも使用された、ウルトラマリンであることが認められた。

②南面漆喰額縁蛇腹窓と円柱

南面のバルコニーに面して円柱が3箇所立てられ、いずれも柱頭・柱脚に漆喰装飾を施した円柱となっている。経年劣化やバルコニー解体時に一部破損して補修されていたが、当初の姿を残していた（写真-3）。所見では額縁蛇腹と柱頭・柱脚蛇腹の形状が連続している事やジョイント等から、現場引き漆喰蛇腹工法で行われているようである。形状が複雑で緻密なことから、漆喰蛇腹工法に熟練した職人によって行われたものと思われる（写真-4）。工法は

破損部分から見ると、まず砂漆喰で中塗りまで行い、漆喰ノロを塗り重ねて仕上げている。中には石積風漆喰壁と同様に、瓦を細かく割ってアンコウとして埋め込んで仕上げている箇所も見られた。また円柱は木材の丸太に漆喰の喰い付をよくするため、刃物できめ細かい目荒らしを施し、砂漆喰を10mm程度の厚さに塗り、鍔で引き摺って凹凸を付けて仕上げていた（写真-8）。恐らく、自然の風合いを意図したものであろう。長八も晩年にはこの引き摺り仕上げを好んで作品に採用している。詳しいことは次号以降の鍔絵の項目で紹介致しますが、松城家でもこの仕上げを背景とした鍔絵を制作している。尚、柱脚の一部でも瓦を細かく割って埋め込んで仕上げているので、額縁蛇腹と柱部分の施工は同一職人によって行われたものと考えられる。

③北面漆喰額縁蛇腹窓と唐草模様

南面は漆喰額縁蛇腹付きの窓が3箇所設けられ、いずれも円柱は開口部中央にそれぞれ3本立っているが、北面は建物の中央から西側方向に漆喰額縁蛇腹付きの横長の大開口窓の中に3本の円柱が配置されている。漆喰額縁及び柱頭・柱脚蛇腹は共に意匠と施工方法は南面窓と同一の仕様となっている。しかし、一方では写真-5のように龍の間と次の間をまたがる東側方向の窓では意匠が異なり、漆喰で柱を角形にし、柱頭部分は社寺でも見られるような絵様肘木と斗を設けている（写真-6）。また上部にはアール状の漆喰蛇腹を施した唐草模様の鍔絵があり、和と洋風が混在した空間となっているのが特長的である。窓杵は漆喰を見込み部分まで塗り廻している。剥落部分からの所見では木で造作した窓杵に土で中塗りまで行い、砂漆喰に白漆喰を塗り重ねて仕上げている。唐草模様の鍔絵については、次号以降の鍔絵の項目で述べますが、淡青色地の砂漆喰面に白砂漆喰をレリーフ状に盛上げていた。全体的に力強く滑らかに仕上げられており、漆喰鍔絵に精通した技術レベルの高い職人によって施されたものと思われる。

④東面漆喰塗籠窓

2階階段室外側に設けられており、西面と同様の鎧戸形式窓となっている（写真-7）。扉のみ木製であるが、窓台・廻り縁は漆喰で仕上げられている。ここでの廻り縁は西面の半円形窓と同様の三段になっており、あたかも土蔵観音扉をおもわせる漆喰仕

上げとなっている（写真-8）。また窓と窓の中央にある方立柱部分をアール状に塗り回すなど細部に至るまで丁寧に仕上げており、ここでも左官職人の技術レベルの高さを伺い知ることができた。経年劣化により、一部でひび割れや剥落が生じて補修をされている箇所も見られたが、ほぼ当初の姿を残していた。雨が当たる裾部分やひび割れ・剥落部分からの所見では木下地に土で中塗りまで行い、漆喰を塗り重ねて仕上げている。

以上のように窓廻りを見ても、松城家の漆喰装飾施工は優れた職人によって行われたことを知ることができ、前号で述べましたが、言い伝えによると主屋の左官工事は多くの伊豆の弟子達も施工に加わったとされていることから、その技術レベルの高さの証とも言える。



写真-1 西面外壁修理工事完了



写真-2 擬鍔戸窓。全てが砂漆喰上げで、入隅部分で淡緑色と焦げ茶色の着色が見られ、上部には半円形擬窓がある。漆喰枠を三重に施し、洋風意匠を強調している



写真-3 南面（正面）修理工事完了

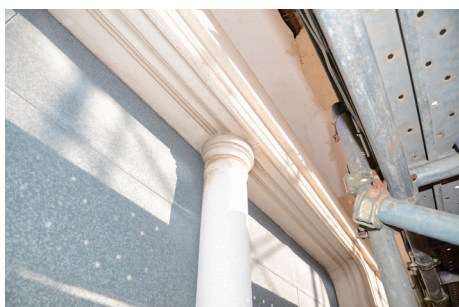


写真-4 南面窓漆喰額縁蛇腹上部・柱頭



写真-5 北面龍の間・次の間外壁修理工事中



写真-6 柱・頭部漆喰装飾仕上げ



写真-7 東面漆喰蛇腹窓修理工事完了



写真-8 漆喰蛇腹窓詳細 二連窓の方立柱部分はアール状に塗り廻している

引用・参考文献

- ・重要文化財 松城家住宅主屋ほか6棟保存修理工事報告書本文編 公益財団法人文化財建造物保存技術協会 令和4年12月 沼津市